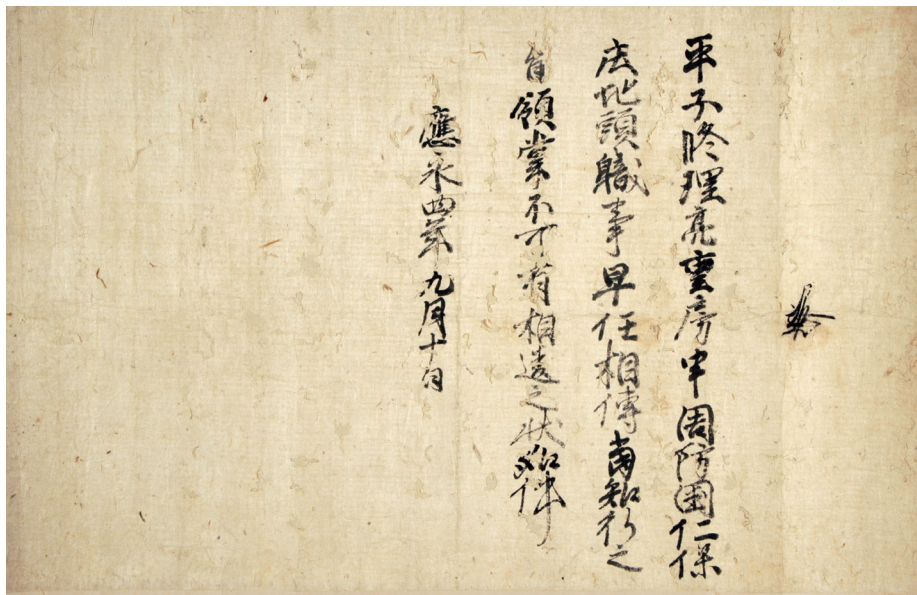


室町幕府の発展（足利義満）



* 三浦家文書甲2（29）「足利義満御判教書」。本文は「平子修理亮重房申す、周防国仁保庄地頭職の事、早く相伝・当知行の旨にまかせ、領掌相違あるべからざるの状、くだんのごとし」

解説

約60年間にわたって、吉野と京都の南北二つの朝廷とそれぞれに味方する勢力が、全国的に争った南北朝の動乱を終わらせたのが、尊氏の孫の足利義満（1358～1408）です。

室町幕府は、鎌倉幕府をまねた支配のしくみを整えますが、政権の所在地が鎌倉ではなく京都であった点や、執権ではなく管領が將軍の補佐役として力を持った点が大きく違います。そして、幕府は朝廷が持っていた政治的、経済的な権限を次第に吸収していき、全国を支配する唯一の政権となりました。こうして、足利義満は公家・武家両勢力の頂点に立ちました。

写真は、足利義満が1397（応永4）年9月、周防の武士である平子（たいらご）重房に対して、これまで通りに仁保庄（山口市）の地頭職を保有することを認めた文書です。

* 当館には、足利義満の出した文書として、三浦家文書甲2（21）、熊谷家文書5（30の12）、出羽家文書44などがあります。

* 仁保氏（平子氏・三浦氏）に関する参考文献として、『仁保の郷土史』（仁保の郷土史刊行会、1987年）、『瑠璃光寺遺跡』（山口市教育委員会、1988年）などがあります。

* 当館に寄託されている「三浦家文書」は、仁保氏に伝えられた文書群です。その大部分は活字になっています（『大日本古文書家分け14 熊谷・三浦・平賀文書』、『山口県史』史料編中世3）。